

平成 26 年 10 月

2014 奈良県立医科大学和歌山県立医科大学
学生災害ボランティアバス 復興支援活動
活動報告書

N A R A W i l l
奈 良 県 立 医 科 大 学
学 生 災 害 ボ ラ ン テ ィ ア グ ル ー プ

1. 活動概要

奈良県立医科大学学生 9 名は、和歌山県立医科大学学生 12 名とともに、平成 26 年 8 月 18 日（月）から 8 月 23 日（土）の間、福島県内でボランティア活動などを行った。南相馬市小高区では力仕事ボランティア活動として、家具出しや草刈りを、鹿島区では仮設サロンでボランティア活動を行った。また、南相馬市小高区、鹿島区、相馬市松川浦では津波の被災地を視察した。福島県立医科大学では、災害医療セミナーを受講し、PFA（サイコロジカルファーストエイド）、災害医療現場の救急対応トレーニングの演習を行い、放射線についての講義を受けた。

2. 主な活動

18 日（月）	出発式（奈良県立医科大学） 難波で和歌山県立医科大学生と合流
19 日（火）	被災地域の視察（南相馬市小高区、鹿島区） 仮設サロンでのボランティア活動（南相馬市鹿島区）
20 日（水）	力仕事のボランティア活動（南相馬市小高区）
21 日（木）	仮設サロンでのボランティア活動（南相馬市鹿島区） 津波被害地域の視察（相馬市松川浦）
22 日（金）	災害医療セミナー参加（福島県立医科大学）、福島市出発
23 日（土）	奈良県立医科大学到着、解散 （和歌山県立医科大学生は難波で解散）

3. 参加学生

医学科 6 名、看護学科 3 名

4. 被災地の視察（南相馬市小高区・鹿島区、相馬市松川浦）

19日に南相馬市鹿島区、21日には相馬市へ行き、被災地の視察をした。小高区は、原発の避難指示解除準備区域に指定されているために3年経った今でも瓦礫や家屋が震災当時の状態で残っている様子を目の当たりにした。また相馬市では、津波の被害にあった松川浦大橋付近に降り立ち、復旧が進む一方で被害の爪痕も未だ残る様子を視察した。「自分自身の目で被災地を見ているのにも関わらず、そこに地震や津波、放射線の被害が発生したということがなかなか実感出来ない」と感じた学生もおり、被災地を知るといことの難しさを参加者一人ひとりが感じていた様子であった。また、まだまだ復興のための支援が必要だということを伝えるべきだと考えた学生もいた。



福島第一原発 20 km圏内で復旧がまだ進んでいない南相馬市小高区

5. 仮設サロンでのボランティア活動

19日午後と21日午前に、南相馬市鹿島区の仮設住宅に訪れた。そこでグループに分かれて仮設サロンを開催し、傾聴活動、レクリエーションを行なった。レクリエーションとして、クイズ大会やマッサージを行い、参加者と交流を深めた。また、奈良県のご当地キャラクター“せんとくん”の登場で広い年代の参加者に喜んでもらうことができた。「生で聞く被災者のお話はとても貴重なものであり、新聞やニュースではなくて直接来て話を聞くことの大切さを考えさせられた」、「『100の言葉より1つの行動が大切。だから学生さんがこうして来てくれることが一番ありがたい。』と言われたことが印象に残っている」と振り返る学生もいた。実際にそこで生活する方と直接話すからこそ感じ取れる想いがあると知り、それを知ることが現地に赴く意味でもあるのだと感じた。



**南相馬市鹿島区仮設サロン
クイズで参加者と交流する学生**

また今回は2日にわたって活動し、1日目の課題を2日目に生かすことで、よりよい活動ができた。

6. 力仕事ボランティア活動

今年度から初めて取り入れた力仕事ボランティアは、NPO法人が運営する南相馬市ボランティア活動センターの協力で行った。グループに別れ、2グループが家屋内の片付け、1グループが家屋周辺の草刈りを依頼された。活動場所は夜間立入禁止区域であり、草刈りを依頼されたお宅の中は、津波による被害の爪痕が残っており、津波の恐さや日常生活を取り戻すために多くの課題が残っている



**南相馬市小高区 依頼主と共に
家屋の片づけを手伝う学生**

ことが分かった。「私たちができた事はほんの少しであったと思うが、実際に見て、経験して、感じて、そして伝えていく事が大事なのだと思う」と話す学生もおり、医療従事者を目指している私たちにとってこの活動は災害が起きた時に必ず力になるであろう貴重な体験であったと考える。

7. 災害医療セミナーへの参加（福島県立医科大学）

福島県立医科大学における災害医療セミナーでは、災害時におけるメンタルヘルスケア、災害発生後の患者受け入れ病院の対応訓練を受けた。震災後の放射線による健康リスクについて学ばせていただいた。超急性期の医療である災害医療に直接触れることで、深い理解を得ることができた。また、放射線・放射能についての講義では、インターネットやニュースで不確かな情報が流れるなか、医療に携わる人々が、一般の人々に放射線・放射能についての正しい知識を提供する必要性を感じた。「今回のセミナーで、自分の知っている医療とは全く違う医療にかかわった経験は非常に刺激的なものであった」「これを機に、災害医療について更なる経験と理解を深めていきたい」と感じた学生もおり、災害医療について自分の頭で考える、とても有意義なセミナーであった。



**福島医大での災害医療セミナー
会場全体を使って救急医療を学ぶ**

8. まとめ

「思っていた以上に復旧が進んでおらず、支援はまだまだ足りないと感じた」「ボランティア活動を通して、実際に被災地に行くという行動に意味があり、震災のことを忘れず何かしようと思っている人たちがまだまだいるということが被災者にとって喜ばしいことなのだと気づくことができた」と話す学生もおり、活動前後で参加者の意識が大きく変化した点で、今回のボランティアバスには大きな意義があったと考える。また、継続して参加している学生は「3年を節目に、被災者の心理は大きく変化しているのではないか」と感じ、変わりゆく被災地を知るのには、やはり実際に足を運ぶ必要があると考えた。今回のバスをきっかけに、被災地への継続的な支援をしていきたいと考えるようになった学生も多数おり、現地へ足を運び、見て感じて考えることで、支援の輪が広がるのではないかと考えた。

9. 協力

独立行政法人国立病院機構災害医療センター
福島県立医科大学災害医療総合学習センター
南相馬市社会福祉協議会南相馬市災害復旧復興ボランティアセンター
公益財団法人福島県青少年育成・男女共生推進機構福島県青少年会館
NPO 法人災害復興支援ボランティアネット
株奈良観光バス
株農協観光奈良支店
農家民宿いちばん星
Fukushima WILL（福島県立医科大学学生災害ボランティアグループ）